

色ベタ (前号流用)
or
(スミベタ)

柿沼 孝泰

KAKINUMA, Takayasu

東京医科大学麻酔科学分野

栃木県出身

東京医科大学・1997年卒業

＜所有資格＞ 11a ロダンDB 16H
 麻酔科指導医・専門医・標榜医 / 日本医学シミュレーション学会 CVC インストラクター・SED インストラクター / 日本心臓血管麻酔学会認定指導医

0.12 ミリケイ
スミベタ
(以下同)11a ロダンM 16H
22w 詰

■座右の銘

良質な医療資源であること

■これからの目標

今、一番興味あることは麻酔科医の社会性について。多くのタスクをこなし、多種の職種と患者との間のバランスをとることができる独特な医療者である麻酔科医が、周術期をベースに社会的に何ができるか考えていきたい。障害者に対する周術期医療などはテーマの一つです。

■message

どうにもならなかったり、能力以上のタスクに
 応えられなかったりと、うまくいかないことが
 6割。手本にはならない先人のひとりかもしれ
 ません。唯一、医療要求に対してはずっと真摯
 であろうとしたことだけがこだわりでした。因
 らずも、医師としての時間のほとんどを大学病
 院で過ごしたなかで「学校の先生」の経験が、
 非常に大きな人生の副産物でした。大学病院に
 は、スモールワールドながら非常に多彩な悪・
 扉があり、たくさんの医師の成長にかかわる、
 間違いなく特有の面白さがあります。

みんなのプロフィール帳

◆ 医師を志した動機 ◆

大学入学後も医師になることに迷いがあり、再受験をした。
 大学生活の中で医師になる覚悟をした。

医学部卒業からこれまでの歩み

1年目：東京医科大学麻酔科入局、結婚

直接入局の時代。標榜医・専門医取得後に転科する先輩が多く、専門科を決められず東京医科大学麻酔科に入局し大学院生となる。結婚するが月半分以上が当直の勤務。

2年目：厳しい症例が多く、手術後に患者が亡くなることについて疑問だらけだった。

3年目：麻酔科標榜医 取得

4年目：春山記念病院 麻酔科・整形外科

新宿・歌舞伎町の真なる野戦病院で、表に出ない社会医療について多くを学んだ。整形外科への転科を迷ったが、生命に直接接する周術期医療から機能外科への転換はすでにできなかった。

6年目：医療事故への関わり、混迷の時期、長女の誕生

中心静脈関連の大きな医療事故に関わり、麻酔科医が医療安全の盾とならなければならないと考えようになった。しかし続けて、自分が情熱をかけて関わった麻酔医療の一連の心臓手術案件、肝移植案件がことごとく社会に否定された。麻酔科医は質の悪い周術期医療の片棒を担いではいけない。何度もなくしたが、目の前の医療に集中することでなんとか気持ちを立て直した。長女誕生もICU勤務で1年間あまり会えない生活。この頃、全国ネットのニュース番組で、関西の高収入フリーランス麻酔科医に対する、低収入、過酷な大学勤務医の代表例としてインタビューされる。

7年目：東京医科大学〇〇医療センター 麻酔科、JB-POT、学位取得

施設初のOPCABを経験し心臓麻酔に目覚める。毎週5件心臓麻酔をかける。その後は大学病院に戻り、宮田和人先生・金澤裕子先生と合流しロボット心臓手術麻酔の立ち上げなどにかかわる。新宿心臓麻酔研究会で他施設の先生から多くを学ぶ。

12年目：自治医科大学さいたま医療センター 麻酔科、周産期麻酔、アラームエラーの研究

短期間、研修医に紛れて勤務させてもらう。そこで東日本大震災を経験、村山隆紀先生をはじめ、麻酔科医が災害に立ち向かう姿勢に感銘を受ける。10年目ぐらいから周産期麻酔を勉強し始め、自身の子の無痛分娩での胎児心拍低下、局所麻酔中毒を経験、コロンビア大学の森島久代先生存在を知り、施設の周産期麻酔の向上に力を入れた。この頃、科研費で手術室のアラームエラーの研究をする。

16年目：日本ペインクリニック学会、慢性疼痛学会、神経麻酔・集中治療学会の主催事務局

医局長時代に、内野博之先生、大瀬戸清茂先生のもと、これらの学会を主催した経験が、多くの先生を知る機会となる。

19年目：伊勢志摩サミット、東京麻酔専門医会学術委員

伊勢志摩サミットで緊急麻酔担当として伊勢赤十字病院にスタンバイし、オバマ大統領（当時）の演説を固唾を呑んで見守ったことは貴重な経験だった。また、東京麻酔専門医会で素晴らしい医師たちを知る機会を得たことは大きな財産となった。

26年目：CVラインセンター長 就任

故三木保先生に指名された。厳しい医療事故に関わった経験を活かせるのはありがたいであった。施設の医療安全に貢献することとなった。